

# 「外国語としての英語」から「国際語としての英語」へ 英語教育再考

矢野安剛

## はじめに

戦後50年余、わが国における英語教育はしばしばその教育効果が思うように上がらないと非難されながら、カリキュラム、教材、教授法、教師養成などの見直し、改善がさまざまな方法で試みられてきた。ここ数年その歩みはとくに顕著で、文部科学省の「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想」なるものの旗印のもとにさまざまな政策が企画され、あるいは実施されている。英語教育の小学校への導入、先進的な英語教育の推進としてのSELHi (Super English Language High School) の実施、教員にTOEFL 550, TOEIC 730、英検準1級以上の英語力を義務づける計画、公立の中学校、高等学校の全教員に2週間の集中訓練を行うという再教育計画など、枚挙にいとまがない。戦後、「総ての子どもに教育の機会を」というスローガンのもとに始った平等主義の弊害が現われはじめ、少人数指導、習熟度別指導などの教育の個別化も計画されている。だが、世界における英語の使用は随分と変わってきているのに、わが国における学習・教育の目標としての「英語」そのものに対する議論は鈴木(1975)のEnglicの提唱以外には寡聞にして知らないし、学んだ英語の使用についての議論も十分とは言えない。

英語は、およそ1,500年の歴史のなかでイギリスという小さな国の言葉から、いまや世界の多くの国で話されているだけでなく、さまざまな分野で国際的なコミュニケーションの手段として使われるまでになった。現代世界における英語の機能を考え、日本人が学び、使う英語を考えるとき、それは、イギリスやアメリカなどの英語圏に移民として住むためのものではなく、日本人として国際コミュニケーションの手段として使うためのものであることが忘れられてはいないだろうか。本論では、わが国における「外国語としての英語教育」がその目的とすべきはどんな英語なのか、なんのために教え、学ぶのかを再考する。

## 1 英語はなぜ世界に普及したのか

言語はその話者の数が増えれば増えるほど普及し、力をもつと言われる。それは、より広範な人々がその言語を用いて交流するようになり、より広範な文学作品、映画などの文化的資源を作り、またその言語の辞書、文法書、教材などの教育資源を作っていくからであり、当然の主張である。だが、

その言語を話すのが誰かということが言語の普及にはさらに重要である。1世紀前後から500年ほどの間、ラテン語はローマ帝国の版図であるヨーロッパ諸国で国際語として広く普及した。それはラテン語を話すローマ人の数が被征服者の数より多かったからではない。ローマ帝国の軍事力、技術力、経済力、文化力などの国力の強力さゆえであった(Crystal 2003b)。被征服者たちはローマ帝国の先進技術・文化へのアクセスとしてラテン語を学んだのである。

英語も5世紀頃、ヨーロッパ大陸からイギリスに入ってきて、この小さな島国の言葉として使われはじめ、およそ1,000年の間に英語を話す人口は500万から700万人ほどに増えた。さらに、エリザベス一世の治世の終わり（1603）からエリザベス二世の治世の始まり（1952）までの250年ほどの間に英語話者人口はおよそ50倍の2億5000万人へと飛躍的に増大した。それは主として新大陸アメリカに負うものであった（ibid）。

クリスタル（Crystal 2003a）は英語を現在の国際語の地位に押し上げた要因は2つあると述べている。すなわち、19世紀末にピークに達したイギリスの植民地の拡大および20世紀の経済大国アメリカの出現である。私はこれにイギリスの産業革命をはじめとする科学技術の進展も付け加えてもいいのではないかと考えている。数々の発見や発明による科学技術の発展は世界の人々をその先進科学技術を吸収するために英語の学習に向かわせただろうからである。

英語の世界的普及の内的要因としては、かつてイギリスの植民地だった地域で独立後英語を公用語に採用した国が多いことがあげられよう。植民地だった頃、政府や高等教育の言葉は英語だったし、新聞・ラジオの言葉も英語だったので指導者層に英語が行きわたっていた。また、多民族国家では誰の母語でもない中立的なコミュニケーション手段である英語を公用語に採用することによって、国内の諸民族の融和をはかり、国民意識を高める意味もあった。

外的要因としては、経済大国、科学技術大国アメリカの影響が大きい。その結果、英語は国連をはじめとする国際的な政治、外交から船舶・航空管制、科学技術、書物や新聞・雑誌などの出版物、学会や企業の国際会議、国際ビジネス・貿易、多国籍企業、旅行や広告、音楽、スポーツなど、あらゆる分野にわたって主要言語として機能するようになった。実際、世界の科学技術や学問上の情報のはとんどは英語で発信されている。フランスが世界に誇るパスツール研究所で100年の歴史をもつ機関誌が掲載論文を英語にせざるを得なかつたという。フランス語で書かれた論文は注目されず、後から他誌に発表された英語の論文が先に読まれ、またより多くの人に読まれるだけでなく、購読者の減少を食い止めることができなかつたからだそうである。また、国際的な読者や視聴者向けの新聞、ラジオ・テレビの言語もその多くが英語である。さらに、古代ギリシャ、ローマの哲学者からゲーテ、ダンテ、トルストイから孟子、孔子までそれぞれの言語よりも英語の翻訳を通して世界の人々に読まれている。

このような世界における英語の使用をカチュル(Kachru 1985)はInner Circle（内円）Outer Circle（外円）、Expanding Circle（拡大円）という3つの同心円（three concentric circles）に分けた。

「内円」はアメリカ、イギリス、アイルランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど、

英語を母語として使用している地域である。

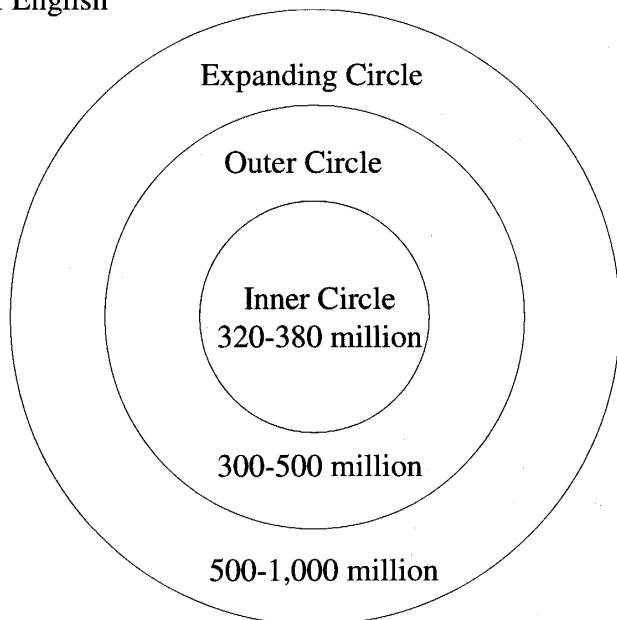
その周りを取り巻く「外円」はインド、ナイジェリア、マラウイ、シンガポールなどで、母語ではないが、英語を公用語として日常的に使用している地域である。その数はゆうに50を越える。

「拡大円」は日常的にはそれぞれの国の言語を用い、対外的なコミュニケーションの際に英語を用いる国々を指す。日本、中国、韓国などのアジアの「外円」以外の国々、ポーランド、ギリシャ、ロシアなどのユーラシア大陸の国々、イズラエル、エジプトなどの中東およびアフリカ北部のアラブ諸国、アフリカ大陸の北部と「外円」国を除いた国々、デンマークやスエーデンなどの北欧諸国、ドイツ、フランスなどのヨーロッパ諸国に中・南アメリカ大陸の諸国などがこの範疇に入る。そして、英語使用人口が急速に増えているのはこの「拡大円」地域である。

この「内円、外円、拡大円」構図は国際語としての英語の研究者の間ではすでに古典的な存在であるが、英語教育界では「内円」はENL (English as a Native Language) 地域と呼ばれており、「外円」はESL (English as a Second Language) 地域、「拡大円」はEFL (English as a Foreign Language) 地域と呼ばれている。この「3同心円」にCrystal (2003b) が最新の人口数を貼りつけたのが図1である。

「内円」での英語使用人口は3億2000万から3億8000万、「外円」では3億から5億、そして「拡大円」では5億から10億となっている。この人口数を同書の第1版 (Crystal 1997) と比べてみると、「内円」は同じ3億2000万から3億8000万であるが、「外円」では1億5000万から3億だったのが3億から5億へ、「拡大円」は1億から10億だったのが5億から10億となっている。わずか6年間で、

The Use of English



Crystal (2003b, 61)

図1 Kachru's Three-Circles of World Englishes

外円では2倍、拡大円は下限が5倍になっている。外円、拡大円での英語使用人口が急激に増加しているのである。

世界の英語使用人口は少なく見積もっても8億2000万、最大18億8000万となり、中間を取って13億5000万とすると世界人口60億の4人に1人がまがりなりにも英語を使えるということになり、その普及率は他の国際語であるスペイン語やアラビア語の及ぶところではない。

## 2 英語種の求心性と多様性

英語がその1,500年の歴史の中でつねに変化してきたことはGraddol(1997, 6)が以下のように述べている。

English has always been an evolving language and language contact has been an important driver of change. First from Celtic and Latin, later from Scandinavian and Norman French, more recently from the many other languages spoken in the British colonies, the English language has borrowed freely. Some analysts see this hybridity and permeability of English as defining features, allowing it to expand quickly into new domains and explaining in part its success as a world language.

言語は時の経過とともに自然に変化していく。「間抜けな」という意味だったniceが700年ほどの間に「感じのいい」という肯定的な意味に変わったり、近世中期までは目上の人への敬称だった「貴様」や「お前」が今は蔑称を含む、目下の者への対称と変わったことなど例には事欠かない。この時間軸とともに地域が変われば独自の発音、語彙、語義などが生まれて方言に育っていくという空間軸に沿った変化も自然な流れである。オーストラリアでは仲間とパブで飲んでいて「今度は俺の奢りだ」は“It's my shout,”という。ときには、言語は国家統制の手段として、また国家の独自性のシンボルとして意図的に拡大・改変してきた。新独立国家アメリカで、イギリスと違った国家的アイデンティティーをその言語に付与したいというノア・ウェブスター(Noah Webster 1789)のアメリカ式綴り字法の提唱がグラドル(Graddol 1997, 6)に引用されている。

The question now occurs; ought the Americans to retain these faults which produce innumerable inconveniences in the acquisition and use of the language, or ought they at once to reform these abuses, and introduce order and regularity into the orthography of the American tongue? … a capital advantage of this reform … would be, that it would make a difference between the English orthography and the American … a national language is a bond of national union. … Let us seize the present moment, and establish a national language as well as a national government.

このような意図もあって、elevator vs. lift, first floor vs. ground floor, subway vs. undergroundなどアメリカ英語は本家本元のイギリス英語と違った語彙・語義を発達させてきたし、program vs. programme, theater vs. theatreなど綴りもより発音に近くなったり、また schedule など発音も違う場合もある。

このような同じアングロ-サクソン文化圏と違って、英語の母語話者でない「外円」地域で英語が使われはじめると、この時間軸・空間軸の変化の度合いはより一層顕著になる。SARSはどこへ上陸しても SARS であるが、言語は移動先でその地域々々の信条、発想、物の見方、価値観、態度などの社会文化的要因を反映して変容していく。これは地域化 (localization), 土着化 (indigenization), 内在化 (internalization) などと呼ばれている現象であるが、フィリピンなどでは元宗主国に反発して「私たちは英語を殖民地化した (We colonized English.)」という学者もいる。

多民族国家シンガポールはマレー語を国語とし、マレー語、中国語、タミル語、英語を公用語としているが、すべての公的生活に英語を使用し、小学校から大学院までの教育は英語によって行われている。若い世代では英語が半ば母語化してきており、日常の使用を通してだんだんとシンガポール化し、Singlish と呼ばれるインフォーマルなシンガポール英語が発達している。問題は、その「シンガポール性」が国際的相互理解度を著しく低下させていることである。貿易立国なので、政府は Speak Good English というキャンペーンを打ち出さざるをえなくなっている。

インド、ナイジェリア、フィリピン、シンガポールなどのような「外円」に属し、日常的に英語で生活している地域では、当初、宗主国イギリスやアメリカの英語および英語使用の基準に従った、いわゆる「外基準」(exonormative norm) に従っていたものが、しだいに母語話者化してくると（すでに Kachru は彼らを機能的母語話者 (functional native speakers) と呼んでいる）、自前の「内基準」(endonormative norm) をもち、それに従った言語表現を創造し、言語行動を取るようになってきた。フィリピンではトイレのことを comfort room と言うし、妊娠中のことを pregnant とか expecting と言わず infanticipating と言う。infant と anticipating からの合成語である。Singlish では統語面にも独自性が出てきている。Can you go to the concert? というのが、Go to the concert, can or not? のように肯定の主語のない原形文に can or not? を付加する。答えは Can. か Cannot. になる。また、シンガポール、マレーシア、フィリピン共通の新しい用法に電話交換手が「もう一度言ってください」の意味で Come again を使っているそうである（本名 2002）。

マレーシアも長年の「マレー化政策」の結果、マレー語がマレーシアの国語 (Bahasa Malaysia) として定着したが、英語力が著しく低下した。技術系大学の卒業生が専門技術はもちながら英語ができるばかりに就職できない。そして、国内の企業がインドなどから英語ができる専門家を採用せざるをえないという事態がおこっており、科学技術分野の教育言語を再び英語に戻している (Kaur Gill, 2002)。

このように、言語の普及は分岐とその結果としての多様性につながる。歴史言語学では、同じ言語を話す民族が、登坂が不可能な高い山で二分された島の両端に移住した場合、500 年でそれぞれの方

言を話すようになり、1,000年で相互理解できなくなり、1,500年で別々の言語に分岐すると教えられたが、1言語の方言か別の言語かは多分に政治的な問題であって、言語学的に処理できない面が残る。相互理解度に関しては、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語などの方が同じ日本語の津軽方言と鹿児島方言の間より高い相互理解度を保っている。さらに、世界規模の移動やコミュニケーションなどが容易な今日、各国、各地域間の相互関係および交流が密になり、その速度をさらに早めている。英語は自然な流れである分岐およびその結果としての多様性よりも、広域で共有できるための共通語への求心性が強い。従って、分岐と収斂を繰り返しながら国際語への道を進んでいくが、振子は収斂の方に傾いているのは確かである。

ここで、述べておかなければならぬのは、アジアの「外円」地域の英語、すなわち、新英語（New Englishes）と呼ばれる英語の種（variety）を、あまり重要でない、周辺的な変種の一つに過ぎないと等閑視してはいけないということである。現在、ヨーロッパ連合、アメリカ合衆国、日本の3大経済ブロックが世界の経済、技術、科学知識、先進工業技術の大部分を牛耳っており、世界の富の半分以上を生産し、その地域内で消費している。だが、経済界の予測では2050年にはこのビッグ・スリーの富の分布は12パーセントに落ち、アジアが60パーセントを占めることになる（Graddol, 29）。強大な軍事力があれば力を得ることができるかもしれない。だが、その力を維持し、また発展させるには政治力、経済力、科学技術力、文化力が必要であることは前述のローマ帝国の興亡が証明している。

では、半世紀後には世界の富の半分以上を左右すると予測されるアジアでは現在なにが起こっているのか。ASEAN10ヶ国に日本・中国・韓国、それにインドが自由貿易協定を結ぶなどして、緩やかな共同市場の形成に向かっている。やがては、拡大しつつあるヨーロッパ連合、カナダ、アメリカ、メキシコの北アメリカ経済圏に匹敵する巨大な経済ブロックが出現することになる。力をもつ、豊かな国の言葉が世界中で学ばれ、使われることは歴史が証明するところであるが、現在これだけ普及し、国際化している英語に代わって、中国語、ヒンドゥ語、バハサ・インドネシア語などが国際語の役割を担うことはまずないであろう。現にASEAN会議は英語で行われている。加盟国での人口比からいえばインドネシア語（マレーシア語とも相互理解度が高い）が使われてもいいのだが、地域内だけでなく、地域外世界との交流も考慮して英語を公用語に採用したのであろう。問題はASEAN地域内で「外円」に数えられている国々で「内基準」英語使用が進むことであるが、それは地域内交流の頻度、密度、重要性からASEAN地域全体で相互に理解できる広域標準英語、すなわち「アジア英語」の形成へとも向かっている。すでに、前述のシンガポール、マレーシア、フィリピン共通の電話交換手のCome again（「もう一度言ってください」）や、この3国とインドでも共通に「電気器具のスイッチをoffにして消す」の意味でcloseが使われている（本名2002）。このように、この地域ではすでに国際的に普及している英語をニーズに応じて変容させながら、使いつづけていくと思われる。経済の中心がアジアに移ったとき、アジア英語が力をもち、世界の他地域はこの種の英語を学び、理解する必要に迫られるだろうことは容易に予測できる。

### 3 広域標準英語

さて、英語が世界へ普及するにつれ、それぞれの地域で地域化や土着化、内在化が進むのは避けられない。だが、かつてのラテン語がフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語へと分岐したように、英語も様々な異なる言語へ分岐するのだろうか。前述のように、これだけ、各国、各地域間の相互関係および交流が密になり、求心性が働く現在、それはまずないであろう。だが、英語は英語でありながら、地域内の交流の密度から地域性の顕著ないくつかの広域標準英語に収斂していくことは容易に予想できる。

正しい英語のモデルはひとつ、正当なイギリス標準英語であるというランドルフ・クワーカ卿 (Lord Randolph Quirk 1982) やデイヴィッド・グラドル (Graddol 1997) の考えはいまだに根強い。イギリスという1地方の言葉であった英語が国際語として世界に広まる過程は、日本古来の伝統的格闘技「柔道」が国際的スポーツ“Judo”へ変容していった過程になぞらえることができよう。柔道は国際化の過程で、その精神性の「道」の部分が脱落し、競技としてのスポーツへと変わっていった。また、神聖な取り組の「白」が多色化されていった。さらには、心技一体となって「小より大を制す」醍醐味が体重制の導入によって消えていった。だが、国際的スポーツとして世界中で多くの人々を魅了し、柔道人口は大きく伸び、世界各地で競技が盛んに行われている。本家本元の日本の柔道界には面白くなくとも、これが国際化に伴う犠牲あるいは変容だと考えなければなるまい。同じことが英語にも言えるのではないか。国際語となった英語という言葉の学習や教育の際に、イギリス英語やアメリカ英語の標準にかたくな固執し、イギリスやアメリカの文化やアイデンティティーのみを目標にするのは、イギリスやアメリカへの移民教育ならいざ知らず、日本人が国際語として使う英語の学習や教育の目的には合致しない。

では、どのような英語を目標にし、どのような態度で英語の学習や教育を志向すればいいのか。まず、今後英語はどのように発展するのかを予測してみる。高い相互理解度をもった国際的コミュニケーションの手段としての機能はますます重要になってくる。だが、同時にいくつかの地域でその域内での交流の頻度、密度、重要性からローカル色をもった広域標準英語が誕生するであろう。私はそれを6つの広域標準英語に分類している (Yano 2001)。

第1は「内円」地域における「母語標準英語」(Mother-tongue English) である。この英語の種は「外円」地域や「拡大円」地域の英語に比べて、共通性が格段に高い。本家の「イギリス標準英語」、分家のアメリカ・カナダの「北アメリカ標準英語」、その兄弟分のオーストラリア・ニュージーランドなどの「南太平洋標準英語」などがこの範疇に入る。ここでの問題は、移民の増加や国際交流の活性化で内部から多様化が進んでいることである。ロンドンの町には外国人や外国からの移住者が溢れているし、ハワイ、テキサス、カリフォルニア3州ではノンネイティヴ・スピーカーがすでに過半数を占める勢いである。いずれ、アメリカの総人口の過半数がノンネイティヴ・スピーカーになると予測されている。そうなると英語という言語の「母語性」(native-ness) が改めて問われることになるか

も知れない。

第2に、この「母語標準英語」に対し、「外円」および「拡大円」地域に以下に挙げるいくつかの広域標準英語が形成されていくと思われる。それを示したのが図2である。その筆頭にあげられるのが「ヨーロッパ英語」(Euro-English)である。これはEU域内の頻繁な交流の必要からすでに現実のものとなってきている。多少のフランス語訛り、ドイツ語訛りを残しながら、流暢なヨーロッパ英語が流通している。ヨーロッパ諸国のTVやラジオでのニュースや天気予報やさまざまな国際会議で耳慣れた英語である。この地域では遅かれ早かれ「拡大円」から「外円」への移行が実現するであろう。すでに、オランダの高等教育機関ではどうせ読んだり、誌上発表したりする学術論文がすべて英語なので、授業も英語でやっているところが多い。次に「ラテン英語」(Latin English)である。北米のメキシコ、中・南米諸国は（ブラジルを除いて）ほとんどがスペイン語を話す。彼らが話す英語は賑やかで、細かいことにこだわらないスペイン語風の英語である。第3に、「アジア英語」(Asian English)である。東南アジアのASEAN諸国連合の共通語は英語であり、シンガポール英語、フィリピン英語、インドネシア英語、タイ英語などの共通部分を増やした英語が形成されつつある。

このように、現在、具体的な形を取り、形成中の「ヨーロッパ英語」、「ラテン英語」、「アジア英語」の他に、点線で示しているように、将来的には「アラビア英語」(Arab English)が近東中諸国および北部アフリカのアラビア語圏で形成される可能性がある。また、北部のアラビア語地域を除くアフリカで「アフリカ英語」(African English)が形成されるであろう。

第4に、これら5つの広域標準英語の重なる部分に「国際共通語としての英語」がある。シェイドをかけた部分である（もちろん、図には出ていないが、ネイティヴ・スピーカー英語もこの5つの標準英語の仲間に加わる）。その「国際共通語としての英語」は、これら6つの広域標準英語のすべてにかぶさる屋根のような共通部分で、すべてと高い相互理解度を備えている。すなわち、「核英語」(Core English)とも言うべき存在である。

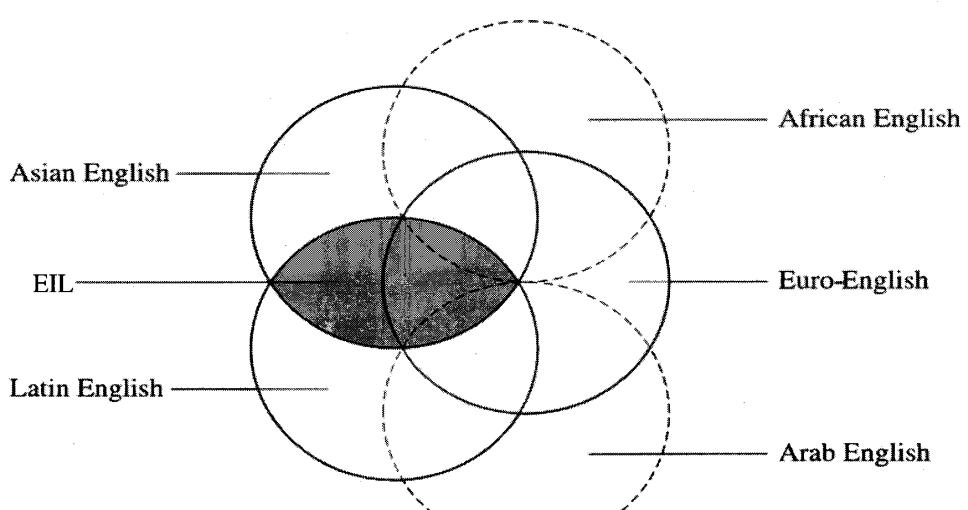


図2 Standard Englishes (Yano 2001, 126)

もちろん、経済のグローバル化によって対象が世界に拡大するのと平行して、英語も国際共通語として普及するというのが一般的な見方ではあるが、世界のローカル化も同時に進行する。衛星放送は同じ作品を世界中の視聴者に提供する科学技術ではあるが、1996年の時点でCNN Internationalはラテン・アメリカ向けにスペイン語の24時間ニュース放送を開始したし、ヒンディー語の放送も検討中であり、CBSもブラジルでポルトガル語のニュースの放送を検討中だそうである(Graddol 1997)。顧客の言語・文化・社会的価値観に合わせた宣伝を行うのがマーケティングの常識であれば、このローカル化は当然であり、英語の国際的普及に必ずしも貢献しないかもしれない。しかし、MTVやインターネットで英語で発信されるさまざまなサブカルチャーは世界中の若者に共有され、国や文化の垣根を低くしている。その多様な使用を通して、世界の英語は上述のネイティヴ・スピーカー標準英語とこの5つの地域標準英語の6つに収斂され、そのうえに「国際語としての英語」が乗っかって、ともに発展していく可能性が高い。

#### 4 国際標準英語

言語の国際化は使用者の相互理解度を高めるために、文法、語彙、綴り、発音、言語使用などに関する標準化を要求するが、一方で使用者はアイデンティティーとして言語の個別性を要求する。国際語としての言語の発展は、いかに両者の緊張関係を調和させるかにかかっている。では、標準語(standard language)とはどのような特徴を備えているのだろうか。まず、標準語は地方語としてのベースがない。後天的に学んだ言語であって、ネイティヴ・スピーカーがいないのである。イギリス標準英語は15世紀のロンドンの地方語にさまざまな他地方の語がダブって形成され、整備されていったが、そうして形成された標準語にはもはやロンドン地方の方言性はない。次に標準語の言語的特徴は主として文法、語彙と綴り・句読法であって、発音ではない。また、標準語はその国で力のある人（それが政治的、社会的、教育的、あるいはどんなものであろうと）が話す言語である。従って、政府、法廷、教育機関、メディアなどで用いられ、その高いプレステイジが社会で認められ、教育の目的とみなされるので、もっとも広く使われ、理解される言語でもある。第4に、標準語はテレビやラジオのアナウンサーのようにごく限られた人が用い、多くは方言か方言と標準語の混ざったものを使う。同様に、書き言葉でも標準語は新聞への投書や印刷物などのフォーマルな場合に限られている。これらの特徴を総合してクリスタルは「母語としての標準英語」を「主に語彙、文法、綴り・句読法で特徴づけられる少数派の種で、もっとも高いプレステイジをもち、もっとも広く理解される種である」と定義している(Crystal 2003a, 110)。

しかし、このように標準化され、地域的に中立な、そしてイギリス標準英語やアメリカ標準英語よりも高いプレステイジをもつ、单一の国際標準英語が構築できるのであろうか。また、存在しえるのだろうか。答えはNOである。では、英語はいろいろな種に分岐していき、やがてラテン語のような末路を辿るのだろうか。その答えもNOである。どの英語の種も、ネイティヴ・スピーカー英語かノンネイティヴ・スピーカー英語を問わず、それぞれのアイデンティティーと特徴をもっている。上

述したように、英語が国際的に普及すればするほど、国際的な相互理解度を保持しようという動きと地域々々の特徴ある独自のアイデンティティを保持しようとする動きの2つの相反する動きが働く。このように英語は世界的なコミュニケーションの手段としての標準化と地域の文化的アイデンティティの体現者としての地域化という緊張のなかで発展していき、国際的コミュニケーションにおいては、文法と基礎語彙を共有し、地域特有の語彙と英語の使い方への許容度を高めていく。その過程で、英語は図2で予測した6つの広域標準英語に収斂していくと私は予測している。

では、それぞれの英語の地域内での使用と国際的使用はどのように考えられるのだろうか。私(Yano, 2001, 124)の予測は図3のようになる。

すなわち、日本語の使用においても、地域的あるいは社会的方言を内と外で使いわけるように、「内円」および「外円」地域では、内ではインフォーマルな中位語(mesorect)や下位語(basilect)を使い、対外的にはフォーマルな上位語(acrolect)を用いる。そこにはネイティヴ・スピーカー英語とノンネイティヴ・スピーカー英語の区別はなく、アメリカ英語種もシンガポール英語種も同じく円筒形で表されている。地域内使用をもたない「拡大円」の日本やデンマークやロシアでは点線で示した、対外的な上位語しかないが、ヨーロッパ連合加盟国のオランダやドイツなどのようにかなり使用の頻度、密度、重要性が高い地域では下方向の矢印で示したように「外円」へと移行しつつある。この点線で示した上位語使用の集合が「地球語としての英語」EGL(English as a Global Language)、「国際語としての英語」EIL(English as an International English)、「共通語としての英語」ELF(English as a Lingua Franca)などと呼ばれている国際英語である。それは、相互理解度を備えた、上述の複数の広域標準英語のゆるやかな連合体であり、ネイティヴ・スピーカー英語、ノンネイティヴ・スピーカー英語を問わず、また「内円」、「外円」、「拡大円」の英語の種を問わず、高等教育を受けた人が使う英語で、高等教育を受けた人なら他のどんな種の英語の使用者でも理解できるような英語であると定義できよう。

そのような国際英語を性格づけるのに次の3点があげられよう。

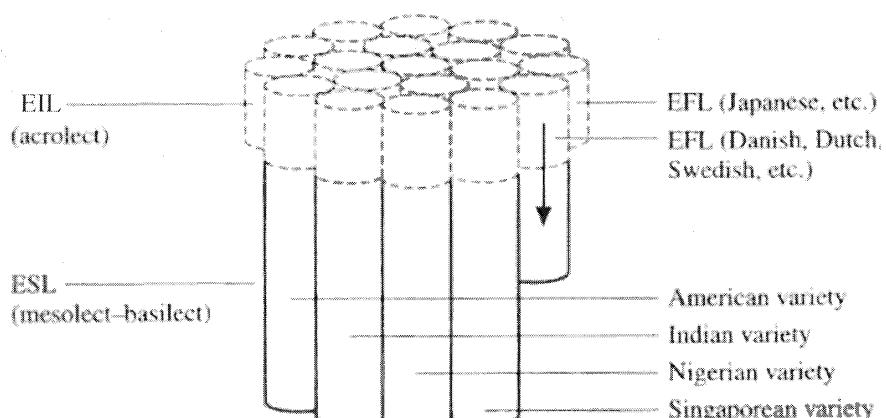


図3 世界の英語種と国際英語

- 1 複数の標準の共存
- 2 相互理解度の保持
- 3 脱アングロ・アメリカン基準

まず、「複数の標準の共有」がある。これはイギリスとアメリカの標準英語にのみ正しさのモデルを求める意を意味する。したがって、「ヨーロッパ英語」、「アジア英語」、「ラテン英語」、アラビア英語」、「アフリカ英語」などの広域標準英語を正当なネイティヴ・スピーカー英語に至る途中の不完全、未完成の英語と見ない。この点で、上述のクワーカやグラドルのさまざまな論述の背後に見えるイギリス英語至上主義は受け入れがたい。多くのヴァラエティーのなかでいくつかの「標準」を共有することは、一つの言語のなかにさまざまな方言があって標準語と共存しているのと同じ見方である。

第2に、「相互理解度の保持」である。かつて、ノア・ウェブスターたちが新しい国にふさわしい独自の「アメリカ英語」を作っていたように、世界に普及する過程で英語はそれぞれの地域で地域文化を吸収し、地域化した英語種に変容していくのは避けられなかつたし、今も状況は変わらない。しかし、今日の世界規模での通信、交流の頻度から考えて、言語が辿る分岐と収斂のバランスはその必要性から振子は収斂のほうに向いていることはすでに触れた。しかも、アメリカ英語やインド英語のように地域化し、変容しても「英語」という共通部分は損なわれないで残る。ドイツ語でもない、日本語でもない「英語性」は維持されているし、相互理解も保たれている。

第3に、「脱アングロ・アメリカン」である。英語が国際語化し、英米人と相対するだけでなく、ノンネイティヴ・スピーカー同士で共通語（lingua franca）として使われる場合が圧倒的に増えた今日、相変わらず英米の基準で他の種の英語およびその使用を裁断するのはもはや正当性を欠く。図3で示したように、複数の地域標準英語のそれぞれが独立した、対等な扱いを受けなければならない。それは「脱アングロ・アメリカン」ではあるが、「脱英語」ではない。もし、アメリカ英語やイギリス英語の基準から他の地域英語を見下す態度を取るとすれば、それは共生の精神に反するし、国際的コミュニケーションの場で不利になる。

では、広域標準英語のゆるやかな連合である、「国際語としての英語」とはどのような特徴を備えた英語なのだろうか。文法と基本語彙は共通だが、発音や一般語彙、そして言語使用のルールは相互理解の域内で多少のぶれがあるような英語である。その特徴は以下のように考えられる。

### 国際語としての英語

#### 言語学的特徴

- 一般化
- 規則化
- 共通化

#### 言語使用上の特徴

- 社会文化的中立化

第1の一般化であるが、これは特殊なものを除こうという提案である。今でも医学用語や科学の専門用語はギリシャ語、ラテン語系の用語を用い、さらに再生産されている。現代英語の音韻規則や形態規則に一致しない場合がほとんどで、「学び易さ」(learnability) を欠き、母語話者か否かを問わず、学習者に余計な負担を強いる。また、「使い易さ」(usability) もなく、これは言語の国際化にとって大きな障害である。アメリカとイギリスで1980年代の初めに「平易な英語促進運動」(Plain English Movement) が起こり、政府の公文書、保険の契約書、薬の服用指示などの難解な専門用語や言い回しをシンプルで平易な文に変えることに力があった。これで公文書や保険契約書の読み違えや薬の誤った服用などにからむ訴訟が減り、また、保険会社など苦情処理の専門家を雇う必要も減り、年間数十億ドルの経済効果があったそうである。

第2の規則化であるが、言語は長く使われているとその地域の特殊性から必然的に様々な不規則な慣用が発達する。また、発音は変わっていくのに、綴りは変わらないことで発音と綴りの乖離が起き易い。To regularize the irregularity と言ってもいいし、To de-irregularize と言ってもいい、そのような規則化が言語の学び易さを高め、使い易さを高める。国際化のためには望ましいことである。例えば、発音と綴りの関係を見れば、高速道路標識の THRU TRAFFIC (本線) の thru, インフォーマルな手紙の nite, などは現行の through や night の綴りよりも現在の発音に近いし、アメリカ綴りの center, theater もその点でイギリス綴りの centre, theatre より優れている。新製品の vodafone の fone も一步前進であると見ていい。名詞の複数接辞形態素なども、symposium の複数が symposia から symposiums の方へ移行しつつあるのは望ましいことである。規則化の点から言えば、ソニーの Walkman の複数形が固有名詞だということで Walkmen ではなく Walkmans であるのもソニーの貢献である。店先に並んだ Mickey Mouse の人形を3個買うときは当然 “Three Mickey Mouses, please.” である。

第3に、他言語と共通のものは国際語としての英語には残し、英語にのみ見られる特殊なものは少しずつ無くしていくべきである。文法と基本語彙に関しては、いろいろな英語の種の間でほとんど差異はないが、例外的に付加疑問文の付加をフランス語の “n'est-ce pas” やドイツ語の “nicht wahr” (not so) や日本語の「ね」のように单一形にしてしまおうという動きはかなりの地域で進んでいる。クリスタルは以下の例を収録している。

You didn't see him, is it? (Zambia)

You are coming to the meeting, isn't it? (South Asia)

They do a lot of work, isn't it? (Wales)

She's gone to town, is it? (South Africa)

You check out now, is it? (Singapore)

You don't mind, is it? (Malaysia)

He has arrived, isn't it? (Papua New Guinea)

You are tired, isn't it? (West Africa)

(Crystal 2003a, 299)

ジェンキンズ (Jennifer Jenkins 2003 personal communication) はロンドンの 25 歳以下の若者の用いる付加疑問文の付加の部分はどんな文の場合でも “in it?” に統一されていると観察している。いずれ, isn't it? か is it? に統一されていく可能性が高いし, 学び易さ, 使い易さの点から避ける必要はない。また, ヨーロッパの学者のなかには, 「国際共通語としての英語」の観点から, 英語の [th] の音は [s] や [z] で置き換えててもコミュニケーションにはさほど支障はない (are communicatively insignificant) であるとデータを出して証明している。他の言語に共通でない英語の [th] 音も少なくともヨーロッパのノンネイティヴ・スピーカー同士のコミュニケーションには [s] や [z] 音で代用される可能性が高い。聴き取れ, 発音できるにこしたことはないが, あまり気にしないでもいい時があるかもしれない。

英語の標準化を促進する大きな要因の一つは英語を第 2 言語や外国語として学ぶ際の「書き言葉」の介在であろう。「書き言葉」は文法は言うまでもなく, 語彙・語義, 練りなどを統一し, 標準化する働きをする。文字を通して英語を学んできた日本人の国際ビジネスマンの使う英語はブッキッシュではあるが, いちばん国際英語のあるべき姿に近いとウッドソン (Henry G. Widdowson 2002 personal communication) が言っているのも「書き言葉」の存在に関係している。このようにして, 国際化の過程で英語は「内円」地域のネイティヴ・スピーカー英語からアメリカやイギリスの地方性を和らげ, 一般化, 規則化, 共通化が進んでいる。

以上の言語学的特徴と並んで, 提唱したいのが, 言語使用における社会文化的中立化である。すなわち, 言語使用においても英米文化圏独特の言語行動の基準をじょじょに薄めていく, 相互に理解できる枠内で「内円」「外円」「拡大円」地域のそれぞれに共通する言語行動の基準を構築していくのである。たとえば, 何か好意を受けた相手に次に会ったときに, お礼の言葉を繰り返す日本的な言語行動, 「先日はどうも」, を英語に置き換えて述べる。感謝の気持ちをもう一度相手に伝える行為を英語圏文化にはない慣習だからと, 英語で話すときは止める必要はない。自分の文化の表現手段として英語を使うのだから。ただし, なにが人類共通で, どんな相手にも理解してもらえ, なにが, 相互理解を超えた, その文化特有なのかの知識を積み重ねていき, 英語を人類共通の言語行動に合うようにならせていくことはつねに心がけておかねばならない。「あいつは腹黒い」をそのまま英語にして He has a black belly と言って理解してもらおうと期待するのには無理がある。

## 5 「国際語としての英語」の教育

最後に, 「外国語としての英語」を学び, 話すわれわれの場合を考えてみよう。9月の初めに仙台で大学英語教育学会 (JACET) の年次大会があり, イギリスからデイヴィッド・クリスタルを招いて特別講演をしてもらった。冒頭で彼が述べていたことが耳に残っている。

When I learn a foreign language, I want to get as close as possible to the linguistic abilities of the persons I am using as my model. I want to emulate their abilities in phonology, orthography, grammar, lexicon, discourse, and variety awareness. I want to sound like them, write like them, and use the language like them.

(D. Crystal "Cloning the Ideal Foreign Language User"  
JACET 42nd Convention, 2003.9.5)

まさにこのクローン志向がネイティヴライクを目標にしている、我々日本人の英語学習者、教育者に共通の認識ではないか。「外国語としての英語」(English as a Foreign Language), すなわち、英米のネイティヴ・スピーカーをモデルとして、そのネイティヴ・スピーカーにノンネイティヴ・スピーカー、すなわち、「外国人」として対峙している。よほど言語習得に優れた人以外には、ネイティヴ・スピーカーばかりの言語運用力(native-like proficiency)というのは、ほとんど到達不可能に近い目標である。学んでも学んでも、達成感よりも劣等感で英語を話している場合が多いのではないか。

この「外国人英語学習者」メンタリティーは2003年10月12日の朝日新聞「特区をゆく：英語活動埼玉県狭山市」というコラムに如実に現われている。小学校の英語活動の時間の紹介記事であるが、その一部を紹介すると、

小学校では、総合的な学習の時間を使って英会話の授業を実施するようになったが、学校によって取り組みはばらばらだった。「全小学校で統一的に教えた」と特区にした。英語活動の指導員の多くは日本人。本物の英語に触れる機会を減らさないため、ALTの小学校派遣も続ける。

つまり、ネイティヴ・スピーカーの英語は「本物」だが、日本人英語教師の英語は「偽物」だという発想である。こういうメンタリティーが文部科学省の官僚をはじめ、英語教育に携わっている専門家の間に根強いのではないだろうか。それは学校での英語の教科書、それに伴うテープやCDなどの音声教材、NHKをはじめとするテレビやラジオの英語番組の出演者や内容、町の英会話学校の教材や教員、すべてに圧倒的にアメリカ英語、そしてイギリスやオーストラリア英語、つまり、ネイティヴ・スピーカー英語であることに如実に現われている。きれいなネイティヴ・スピーカー英語を学び、話したいという理想を追うのはそれはそれでよいのだが、問題はアメリカやイギリスの基準から判断して、外国訛りのインド英語やシンガポール英語、そして日本人らしい英語を蔑み、アメリカやイギリスらしからぬ言語行動を蔑んだり、非難する態度が生まれることである。それは国際的であることや共生の精神に反し、望ましいことではない。たしかに、モデルとしての標準英語は必要である。だが、アメリカやイギリスへの移民のための英語教育ではなく、われわれが日本人として国際的コミュニケーションの手段として使う英語の教育である。そのモデルをアメリカ英語やイギリス英語にのみ求め、他を排斥していいのだろうか。英語の国際的な使われ方を考慮して、他の英語の種も視野に入れ

た柔軟で包容力のある（accommodating）態度で目標となる標準英語を設定すべきであろう。

上述のクリスタル講演の外国語学習のクローン志向であるが、彼は続けてこう言っている。

But I am happy to retain traces of my native accent—for I do not want to lose all my linguistic identity in the process.

これは、アメリカ人やイギリス人になるためではなく、日本人として国際的なコミュニケーションに使うために英語を学ぶ場合には肝に銘じておくべきことである。

では、どのように発想を切り替えたらいいのか。「外国語としての英語」（EFL: English as a Foreign Language）には英語の母語話者であるアメリカ人やイギリス人に対して彼らの所有物である英語を「外国人として」学び、使うという発想がある。従って、その目的は「ネイティヴライク」になること、すなわち、できるだけ母語話者に近づくというクローン志向である。これを、「国際語としての英語」（EIL: English as an International Language）の考え方へ変えるのである。この「国際語としての英語」の概念はハワイにある東西センター（East-West Center）にいたラリー・スミス（Larry E. Smith）が東西の文化交流の経験から提唱した考え方で、ネイティヴ・スピーカー、ノンネイティヴ・スピーカーに関係なく対等な立場で「国際語」として使う英語である。われわれは、「外国人として」英語を学び、話すという考え方から、「国際的な英語の話し手」（an international speaker of English）として英語を話すのだという方向へ発想を転換しなければならない。この考えはラリー・スミスや彼とともに「世界英語たち」（World Englishes）を推進しているイリノイ大学名誉教授のブラジ・カチュル（Braj B. Kachru）を始め、ロンドン大学名誉教授のヘンリー・ウッドソン（Henry G. Widdowson）、ウイン大学教授のバーバラ・サイドルホーファ（Barbara Seidlhofer）、ロンドン大学教授のジェニファー・ジェンキンズ（Jennifer Jenkins）など多くの応用言語学者が共有しており、今後も普及していくと思われるし、また、普及すべきだと考えている。

われわれは、自分の使う英語に日本語訛りがあっても卑下することはないのであり、むしろ日本人のアイデンティティーと考えることもできる。母語である日本語の影響でその発音に多少の外国訛りが出るのは当然である。出生順序を重要と考える農耕社会の慣習から「兄」か「弟」しかない日本語の影響で brother に elder や younger をつけるのもさほどコミュニケーションに支障はない。その語彙や語句にあまり英語特有の慣用表現や諺やメタフォリックな表現がない英語、前置修飾が多い統語構造など、自然とにじみ出る日本語的なものや、次に会ったときに前回のお礼をいう言語行動などはあっても、世界的に通用する英語であればいい。

われわれは「拡大円」において、日常的に英語を使わない。外国人とのコミュニケーションにしか使わない。従って、「内円」や「外円」地域でのように相互理解度を下げる地域化が進まないのはむしろ利点と考えてよい。そこに、われわれが「国際語としての英語」、すなわち、国際的相互理解度の高い英語の構築に貢献できる素地がある。規則的で、平易で、社会文化的に中立的な「国際語としての英

語」を、人類共通の言語および言語行動に合うように変化させていくのに貢献できる立場にいるのである。

### おわりに

現在、世界的に話されている英語が今後どのように発展していくのかを予測するのは難しい。本論で述べた考察も十分なデータで検証されたものではない。「国際語としての英語」が今後どのように変わっていくのか、どのように変えていけばいいのか、そして日本における英語教育もどのように変わっていくのか、変えるべきなのか、次の機会にさらなる考察と提案を試みるつもりである。

だが、どんなに英語という言語の言語形式に通じ、コミュニケーション・コンペテンスを発達させても話す中身がないと相手にされない。HOW、「どのように英語で表現するか」よりもまずWHAT、「なにを言うか」が大事であることは言うまでもない。したがって、HOWにあまり捕らわれず、気楽に、積極的に自己表現を目指す必要がある。同時に英語はすでにアメリカ人やイギリス人だけの所有物ではなく国際的なものだということを認識し、アングロ・アメリカンの基準で他の地域の人々の「国際語としての英語」を軽蔑したりしてはいけない。国際語としての英語は寛容と共生の道具になりえるのである。

### 参考文献

- Crystal, D. (2003a) *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, 2<sup>nd</sup> Ed. Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2003b) *English as a Global Language*, 2<sup>nd</sup> Ed. Cambridge University Press.
- Graddol, D. (1997) *The Future of English?* The British Council.
- Jenkins, J. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2003) *World Englishes: A resource book for students*. Routledge.
- Kachru, B. B. (1985) Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle. In R. Quirk & H. G. Widdowson (eds.), *English in the World* Cambridge University Press, 11–30.
- Kaur Gill, Saran (2002) *International Communication: English Language Challenges for Malaysia*. Selangor Darul Ehsan: Universiti Putra Malaysia Press.
- Quirk, R. (1982) *Style and Communication in the English Language*. Edward Arnold.
- Quirk, R. & H. G. Widdowson, eds. (1985) *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*. Cambridge University Press.
- Smith, L. (1976) English as an Auxiliary Language. *RELC Journal* 7–2, 38–53.
- Yano, Y. 2001. World Englishes in 2000 and beyond. *World Englishes* 20–2, 119–131.
- 鈴木孝夫 (1975) 『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮社。
- 「特区をゆく：英語活動 埼玉県狭山市」『朝日新聞』(2003.10.12)
- 本名信行編 (2002) 『アジア英語辞典』三省堂。

## Abstract

### **From ‘English as a Foreign Language’ to ‘English as an International Language’: Rethinking English Education**

**Yasukata YANO**

The English language has become an international language through Britain's colonial expansion and emergence of a big power, America, along with the development of science and technology in these countries. Today, 320–380 million people speak English as a native language, 300–500 million speak the language as a second language, and 500–1,000 million speak it as a foreign language.

The worldwide spread of English has resulted in the tension between the international use of English with mutual intelligibility and local use with endonormative creativity with less international intelligibility. With the frequency, density and importance of its use in the wider regions, however, several standard Englishes will be formed in the future—Euro-English, Latin English, Asian English, Arab English, and African English besides Mother-tongue English.

Overarching these standard Englishes will be EIL (English as an International Language), which is a loose league of varieties of English spoken and understood by the educated speakers of any variety, native speakers or not. EIL is characterized by shared grammar and basic vocabulary; linguistic generalization, regularization, commonality; and sociocultural neutrality in language use.

The idea of EFL (English as a Foreign Language) implies that English belongs to its native speakers and we learn and use the language as a ‘foreign’ speaker. We need to change the inferiority-bound idea to EIL (English as an International Language), where we use the language as an ‘international’ speaker on an equal footing with the native speakers of English. As a speaker of EIL, we can contribute to the promotion and improvement of EIL since we are not affected by English’s localization.